JSRT 企画

①乳房班

あなたの施設のポジショニング技術、どのように教育していますか?
ー検診施設ではー

公益財団法人 岩手県対がん協会　○髙橋 遥(Takahashi Haruka)

【背景】

乳癌の発見や正しい診断においてマンモグラフィのポジショニングは非常に重要な役割を担っている。しかしポジショニングの技術指導や教育方法に関しては多くの技師が悩まされている。そこで今回は大学病院、市中病院、検診施設での教育に関する話をそれぞれに述べ、マンモグラフィにおけるポジショニング技術の向上について考えることを目的とした。

【検診の特徴】

検診には個人の死亡リスクを下げるための任意型検診と住民や職域を対象とした対策型検診がある。そこで当協会でのマンモグラフィの割合を大きく占める対策型検診での教育について述べた。

【教育内容】

独り立ちまでの研修、練習期間は約一か月を目安とし、その間に接遇や座学、機器の操作説明や検査シミュレーションを行う。乳がん検診はほぼ毎日予定されており、学べる件数が多いのは検診の特長である。独り立ちの指標は検査をスムーズに行えること、画像を見て良し悪しを判別出来ることとしているが、独り立ち後も常に検診バス内に先輩技師がいるため判断に迷う場合も聞きやすい環境である。

【教育における苦労】

当協会では練習用ファントムを所持しておらず、ポジショニングの説明や指導が難しい現状がある。また、集団検診では高齢者が多く撮影自体が困難な例も少なくない。

【まとめ】

独り立ちまでの期間こそ短いが、一日に学べる件数が多いため短期集中で教育することができる。しかしながら教育のためとはいえ集団検診は基本的に2年に1回の検診のため、撮影に対する責任が重いということを常に心に留めておかなければならない。また、受診者は練習台というわけではなく検診に対する不安を与えないよう教育しなければならない。